

REVIEWS



変態と関節技

それ自体がじつに魅力的な作家手製のポートフォリオの頁を繰ってみると、ごろんとした彩色木彫から2013年頃を境とする現在のスタイルへの転換が、作家に圧倒的な飛躍をもたらしたことが見て取れる。それはちょうど、幼体から成体への変態を思わせる。あるボリュームの中に複数の面を設定することで、三次元感覚を操作する論理構造は基本的に変わらないけれど、塊がフレーム状に変わり、素材が多様化することで作品はにわかに動きを得た。とくに目を引くのは各所に現れた継ぎ目である。布が縫われて立体化するように、ジョイント部を基点にしてよぎによぎ空間が立ち上がる。土肥は、かつて彩色によって表現していた複数のインターフェイスを、並立する接面へと読み替えたのである。

その瞬間に、変態のごとく、カンブリア爆発のごとく、多様な種が派生した。縫う、貫く、巻く、挟む、留める、押さえる……素材の変容に伴って著しく増殖したのは接続方法にほかならない。それらの接続に応じて複数の奥行きが生成され、駆け引きを演じる。薄い金属の反射も加わっていっそう複雑だ。

昆虫や植物、ある種のアクセサリや無骨な機械に対する「萌え」というのは、つまりそうした接続しあう点と面に対する美的体験のシミュレーションであつたらう。それらのいずれにも似て、いずれとも異なる土肥の作品は、プロトタイプとしての接続の化け物である。この化け物は着彩もビス留めも重力すらも、等価に飲み込むのだ。[成相肇(東京ステーションギャラリー学芸員、基礎芸術)]

「土肥美穂」展はハギワラプロジェクト(東京)にて、2月27日～3月26日開催。

写真——buttai 30 2014 銅板、布、アクリル絵具 25×23×49cm

© Miho Dohi Courtesy of HAGIWARA PROJECTS